

文芸部作品第八

——透明な叫び

久保はてな

あらすじ

1997年4月Y高に入学した「ぼく」は文芸部に入部した。

顧問は国語科のS先生。文芸部に上級生は不在で、S先生は部活説明会に集まった8名の新生に「課題→実作→合評」という活動をしたいと提案した。

新生のぼくらにいやなどという資格も権利もなく、文芸部はその活動をスタートさせた。1学期の活動を経て先生は9月末の文化祭で発行する冊子のテーマを「叫び」とすることに決めた。

ぼくはムンクの有名な絵『叫び』を取り上げようと思い、あの人物は一体何を叫んでいるのか、まずそれを探求することにした。ママやパパに聞き、中学校時代の親友Oに「何を叫んでいるか」尋ねた。彼らは答えてくれたけれど、どうもしっくりこなかった。

数日後ぼくは一つ年上の従姉の家に行って話し合った。いとはムンクの画集を見せてくれた。それによってムンクが不幸な生い立ちを持っていること、『叫び』には似たような作品があり、薄気味悪い赤ん坊か子どもの顔が『叫び』の人物に似ていることを知った。

いとはオレンジジュースやスイカを出してくれた。部屋は彼女と二人っきりだったので、ぼくは微妙な感情にとらわれてドキドキした。そのうち彼女の両親が離婚することになったと聞いて驚く。いとは涙を流した。結局彼女が語った『叫び』の答えはいとこの心境を反映しているように思えた。

帰路に就いてぼくはゲームのCDを返し忘れたことに気付き、再び家に行った。彼女はいなかった。そのとき庭で大変なものを見つけた。いとこが帰るのを待つかどうか考えながら、ぼくは『叫び』の人物が何を叫んでいるかわかった気がした。これだと思い、黙っていとこの家を出た。

帰宅後ママにぼくが思いついた考えを話すと、ママはあの人物のように顔をゆがめて……。

文芸部作品第八——透明な叫び

久保はてな

—

「ただいま……」

「おかえりなさい。どうだった、学校は？」

台所からママが聞く。毎日、はんで押したような言葉だ。それは夏休みに入っても変わらない。

「別に、特に何もなかったよ」

ぼくもはんで押したような答えを返す。それからバッグをめんどくさそうに肩にかつぎ直して、そのまま二階に上がろうとする。でも、ママは許さない。親子の会話ってやつをしたがるんだ。

ママはエプロンで手を拭きながら、ぼくの前に現れた。

「今日学校には部活で行ったんでしょ。どうだったのよ」

「どうって？」

「あなたの、さ・く・ひ・ん。今日は合評会じゃなかったの。先生やみなさんの評判、どうだった？」

ママはぼくの作品を読んでいたから、文芸部の合評があった日にはぼくの作品がどう評価されたか必ず知りたがる。さらに仲間の作品にもああだこうだと寸評を加える。どうやらママも昔はいくつか詩や小説などを書くブンガク少女だったらしい。

夏休みに入って今日二十五日は文芸部二回目の集合日だった。そして、課題『顔を描く』の合評日でもあった。

「今日はね、部員が全員揃わなかった。だから、作品の合評は次回八月二十五日に持ち越しになったんだ」

「あら、そう。残念だったわね。やれば良かったのに。これからひと月もあけるんじゃ、気が抜けちゃうじゃない」

全くそうだ。部員が揃わなくてやれば良かったんだ。今日は二人不参加だった。先生は最初「二人いないけどやるぞ」って言った。なのに、女の子の「書いた当人がいないと批評をしてもやりがいがいいし、作者も批評を聞けないので参考にならないと思う」なんて言葉に負けてやめてしまった。それじゃあ今日集まったのは一体何だったってことになる。ホントに優柔不断なんだから……。

Y東西高校の文芸部は今年生八名しかいない。東が五名で西が三名だ。S市にあるうちの高校は全国でも珍しい双子高校で、同じ敷地内に東と西、二つの高校がある。一学年七クラスだから、東西全部で四十二学級。だから、施設やグラウンドなどかなりでかい。

基本の授業は別々なんだけど、選択授業、それに運動会や文化祭の行事なんかは東西合同でやる。東には音楽コースと美術コース、西には体育コースと外国語コースの専門コースもある。ぼくは東の一般コース。つまり普通科みたいなもんだ。

部活動は基本的に東西別々だけれど、いくつかのクラブは合同で活動している。文芸部も東西合同の部活だ。顧問のS先生によると、過去二年間休部状態でそろそろ廃部にするつもりだったらしい。

四月の初め、先生は新入生向けのクラブ説明会で、こんな提案をしてきた。
——文芸部というのはどこの学校でも、部員各自が詩や小説を自由に書いて冊子にして発表というパターンが多い。この文芸部もそうだった。しかし、クラブ全体の日常活動として考えると、それではクラブとして寄り集まる意味がない。それに自分で書いているだけで、批判されることがないと、文章表現の練習にはならない。そこで今年から部員が自分勝手に創作するんじゃなく、先生が出す課題に沿って全員同じものを書く。そして、みんなでその合評を行う——S先生はそんな文芸部にしたいと言ってきた（つまり「切磋琢磨」ってやつだ）。

もちろん各自好きな詩や小説は自由に書いて構わない。ただクラブ全体としては課題、書く、合評の三段階でやる。「一年生がこの条件に従ってくれるなら、本腰入れてやりたい」と先生は言った。

入部希望者は全員先生の提案に同意した。もっとも新入生が入学早々先生に逆らうわけなかったけどね……。そんなわけで、文芸部は一年生だけで再スタートってことになった（ぼくらはみな新だけど）。

これまで春の遠足や芸術鑑賞当日の体験を八百字程度で書いたり、筒井康隆の『バブリング創世記』をまねて「自分創世記」を作ったりした。

それぞれ「遠足当日の自然描写を入れよ」とか、「(芸術鑑賞の会場である)建物を必ず書け」とか、なかなか条件が厳しい。今度の課題なんか「顔を描く—その際直喩を必ず入れる—」だった。絵じゃないんだから、文字で人の「顔」を書くのはかなりしんどかった。

合評の方は作品を順に読んで行って良い点悪い点を批評し合う。みんながどう課題に取り組んだかすぐわかるし、部員それぞれの個性的な文章が読めるので結構楽しい。きっちり課題をこなした作品に感心する一方、何だかよくわか

らない難解な作品があつたりする。西校のAなんか、ちっとも課題に答えないはちゃめちゃな文章を書く。先生はうんざりしているけれど、ぼくはそれもそれでいいかなと思う。

各々の作品に作者名はつけていない。それでもだいたい誰が書いたか見当はつく。だから、批評も書いた人を傷つけないような言葉が多い。

それでもときにはぐさっと刺さる批評が出る。先生を含めて全員が批評するので、自分の作品の番になると内心どきどきする。他の部員の作品を読んで、うまいなあと思い、自作を振り返って自己嫌悪を起こすこともたびたびだった。

そして、今日二十五日が第四回課題「顔を描く」の合評日だったというわけだ。

結局、さっき言ったような事情で合評はできなかった。まあ今日は暑くて何となくだれていたし、みんなも互いに批評し合うっていう雰囲気じゃなかったな……。

あ、そうか。夏休みのテーマは決めたんだ。

「でも、クラブ全員が夏休みに書くショートショートは決まったよ」

「あら、そう。なーに？」

ママはぼくの顔をのぞきこむようにする。そういう子ども扱いがぼくはいやなんだ。

ぼくはママの顔から視線をそらした。

「叫び……って言うんだ。先生が決めたんだけど」

「叫び。ふーん……ムンクの叫び？」

やっぱりママもムンクが出てきた。ま『叫び』って聞けば、誰でもすぐにあの絵を思い出すだろう。

「先生によると必ずしもムンクから取ったわけじゃないって。この間の神戸須磨の小学生惨殺事件なんかを見ると、現在の人間で叫んでいるようで必ずしも叫んでいない。だからこそ『叫び』をテーマにしてみたい、とそういうことらしい。何だかよくわかんないけど……。先生は文芸部員が『叫び』というテーマをどのように描くか、期待してると言ってたよ」

「そう。叫び……ねえ」

「それにドリアン助川の『叫ぶ詩人の会』ってのがあって、ドリアンが先週テレビ朝のニュース・ステーションに出演していたそうなんだ。ドリアンの話を聞いた先生は感激したのか知らないけど、それもあって『叫び』をテーマにしたよ」

先生のそんなところも安易だと思う。だいたい最初からそう決めていたなら、部員一人一人に「夏休みの共通テーマを各自一個ずつ挙げろ」なんて聞かなくちゃ良かったんだ。

部員からは「縁は異なるもの味なもの」、「そば（ホット）」、「心は二つ」、「戦争と人」なんて言葉が出てきた。みんな無理してテーマをひねり出したと思う。

それなのに結局先生は難癖つけて多数決も取らず、自分が提案した「叫び」に決めてしまった。民主的を装って実際は独裁的ってやつだ。

ぼくはNが提案した「縁は異なるもの」や、Tの「そば（ホット）」なんか、ちょっと変わって面白いと思ったのに……。

ただ、このテーマは9月末にある文化祭で製作する冊子の共通テーマになるとのこと。つまり、書き上げた作品のうちいくつは冊子に掲載されることになる。先生は「できたら全員採用したいけど、そうとは限らないよ」とつぶやくように言った。

ぼくはバッグをかつぎ直して二階へ上がろうと思った。しかし、ママはなかなか離してくれない。

「なあにそのドリアン何とかって。何だか熱帯の果物かチーズケーキの名みたい」

「まったくもう。今若者に人気のDJさ。ラジオの深夜放送で若い人の人生相談に乗ってる人なんだ。それにドリアンは『叫ぶ詩人の会』というバンドも結成してすごい歌を歌ってるそうだよ。そのリーダーがドリアン助川って言うんだ。じゃ、ぼく勉強があるから上行くよ」

結局ママの口車に乗せられて親子の会話につきあってしまった。

ぼくはママの「ふーん」という声を背に受けながら階段を駆け上がった。

ママが「おやつ、いらないの！」と声を張り上げた。ぼくは「いらない！」と答えてドアを閉じた。まったくもう。

二

夕食は珍しくパパもテーブルに座った。一週間に一回か二回パパも一緒に夕食の席に着く。今日パパの前には缶じゃなくビールの大瓶があった。何かいいことがあったのかもしれない。

それに今日はぼくの好物のトンカツだ。ママがにこにこしているから、今日はパパとママの結婚記念日なのかもしれない。だいたいお祝い事的时候は瓶ビールだ。缶じゃ雰囲気が出ないらしい。でも、乾杯はなかった。

ぼくはすぐトンカツにかぶりついた。ナイフとフォークなんてまだるっこしくて使っちゃおれない。

「夏休みの共通課題のテーマが『叫び』になったんだって？」

パパはビールを飲みながら言った。

ぼくはちょっと目が点になった。もうその話がママからパパに伝えられたらしい。

ぼくは文芸部のことをパパと話すのはあまり好きじゃない。ママは心底興味があつていろいろ聞いたり話したりするけど、パパはそうじゃない。

パパにとっては文芸部にしてもぼくの創作にしても関心はないし、取り立てて話したいことでもないんだ。ただ他に話題がないから、そしてやっぱりパパも「親子の会話」をしようと、授業や部活のことでぼくに話しかける。パパがいやいや話してるってことはパパの顔を見ればすぐわかる。

ぼくとパパは一週間に一度か二度しか顔を合わせない。パパは朝早く出て行くし、夜も帰りが遅い。だからパパはぼくと顔を合わせると、まるで義務でもあるかのように会話を交わしたがる。

おそらくママの助言もあるのだろう。「親子の会話が大切よ」とでも言っているに違いない。ぼくは別にパパと話したいことがあるわけじゃない。だから無理しなくてもいいのになと思う。しかし、今日だけはパパにもマジで聞いてみたいことがあつた。

「今何を書くか迷ってるんだけど……パパはムンクの『叫び』って絵、知ってるよね。あの橋の上の人物って一体何を叫んでると思う？」

ぼくは自分の部屋に入るとすぐ中学校の美術の教科書を引っ張り出した。そしてムンクの『叫び』を探した。絵は三年のにあつた。ぼくは暫くそれをながめた。そのうち絵の中の人物は一体何を叫んでいるのか気になり始めた。

夕食までずっと考えたけれど答えは出なかった。でもうまくいけば、ムンクの『叫び』を素材として課題のショートショートが書けるかもしれない。そんな気になっていた。

「うん？ ムンクの『叫び』か。そうだなあ、絵は見たことがあるが……中央で両手を頬にあてて何か叫んでいる人物だろ。あの人物が何を叫んでいるかって？ 考えたこともないな。まあたぶんキヤーとかアレーとか、悲鳴を上げているんじゃないのか」

ぼくは心の中でずっこけた。そんなことはわかりきったことだ。

もうそれでパパとの会話は「ジャンジャン」としたかった。でも、それではパパに申し訳ないんで、ぼくはさらに続けた。

「じゃあパパはあの人を女性と思っているんだ」

「あれっ、女性じゃないのか？」

「うん。絵を見る限りじゃよくわからない。でもたぶん男性だと思うよ。だって頭がつるつるにはげてるんだ。顔の目や口の形も男性みただし。ただ細身で身体をくねらせた様子は女性的な感じもするし……一体どっちなんだろう」

パパはうなると、考えるふりをしてビールを飲み干した。どうせ何も考えていないに決まっている。ママがパパのコップにビールを注いだ。そうして自分のコップにも少し注ぎ足した。

こういう時ママは誇らしげにブンガク少女らしい解釈を披露してぼくらをうならせる。

「ママはね、あの人物は男性でも女性でもない、現代の人間一般を表しているんだと思う。つまり、現代の人間の不安定さ、不安な心を描いているのよ。だから、あの人物は現実には聞こえる叫びじゃなく、声なき声、不安そのものを叫んでいる、と思うな」

パパは「なるほど！」とうなった。ぼくも「ふーん……」とうなった。

これがママの欠点だ。子どもがあの人は何を(な・に・を!) 叫んでいるか、それを問題としているのに、ママの答えは「声は出ていません」と来る。

それじゃあ子どもの問いに答えているようで、結局は問いそのものを無意味なものにしている。ママはそんなことにも気づかない。それに現在の人間一般とか、その人間が出す不安の声なんて説にしても、教科書の解説通りじゃないか。

こんなことは今までにもよくあった。ママの意見はどこか新聞やテレビ解説者の受け売りってことが多かった。でも、ママはそれを自分の意見と信じて疑わない。だからってぼくは別にママを軽蔑しているわけじゃない。ママの意見は時に貴重なこともある……。

この話題はママの解説によって結論めいたものが出たので、それで終わりになった。

それからぼくは黙々とトンカツを食べた。パパは最低限の義務を果たしたと思ったのか、ピーナッツや裂きイカをつまみながら、テレビに目を向けていた。カツにはまだ手をつけていない(温かいうちがおいしいのに……)。

ホントに今日のカツはからりと揚がってうまかった。ママは専業主婦だから結構料理に手間をかける。キャベツの千切りなんかプロ並みだ。お世辞を言おうかと思ったけど、やめておいた。

パパとママは神戸の酒鬼薔薇聖斗(さかきばらせいと)事件の話をし始めた。

ちょうどテレビのニュースで犯人の少年が今日家庭裁判所に送致されたと報じていた。二人は少年の今後や少年の両親のことなどを話している。

パパは「普通の大人なら間違いなく死刑だろう。それが少年というだけで刑が軽いのはおかしい。今の子どもは昔と違うんだから、少年法を改正して刑罰を与える年齢を引き下げる必要がある」なんてことを言う。

パパの言葉を聞きながらぼくは考えた。もしもあんなひどい犯罪を犯したのがぼくだとしたら、それでもパパは同じことを言うのだろうか。

ママの方は時折ちらとぼくを見て「この子もねえ……」とか、(その「も」って何なんだ?)「大丈夫かしら……」(当たり前だよ!)などと呟いている。ぼくは聞こえないふりをしてごはんをかきこんだ。

まったくあの事件以後、年が近いこともあってぼくらを見る大人達の視線が何か今までと違う。あるいはぼくの両親だけかもしれないけど、まるで腫れ物にさわるような感じだ。

ママは時々まるで幼稚園児に対するように「愛情一杯よ」てな感じでぼくとスキンシップを取ろうとする。

一方、パパはお前はもう子どもじゃないんだから、責任ある行動をとらなきゃいかん——みたいな説教をたれる。そして、『親子の会話』は格段に増加した。ぼくの方はパパママと、ことさら話したいことはないのに。

神戸の事件に関しては一度ずいぶん時間をかけて二人から詰問された。そう、詰問という言い方がぴったり来るほど、根ほり葉ほり聞かれたもんだ。

いじめはやっていないか、猫や犬など小動物を虐待していないか、心の底で不満はないか、などさまざまに聞かれた。大学受験は三年後なので、その件の話題はなかった。

ぼくがいじめなどやっていないし、犬猫の虐待なんかももちろんやったこともないと答えると、パパママは安心したようだ。

ところが、面白いなと思ったのはパパもママも例えば「お前はあの少年の気持ちはわかるか」とか、「お前はあんな残酷なことをしそうか」というような質問をちっともしなかったことだ。後者はたぶん聞くのが怖かったんだ。

もしもぼくが「やるかもしれないよ」などと答えたら、二人はパニックだろう。何かしら遠回しに尋ねてぼくがどうやらあんなことはしない子どもだとわかると、一安心という顔をしていた。

でも、そのときパパもママも「誰かいじめたことはないか」と聞いたのに、なぜ「いじめられたことはないか」と聞かないのか。それも不思議だった。

うちの息子はいじめることはあっても、いじめられるような人間じゃないと信じているのだろうか。

ぼくはパパにもママにもうち明けていないけれど、中学一年の二学期から三学期にかけていじめられたことがある。その頃ぼくは身体が小さかったし、臆病だったので、グループの仲間からパシリみたいにされていた。

最初は単なるパシリだったけど、次第にエスカレートしてプロレスの技をかけられたり、みんなのカバンを持たされ足蹴にされたりとか、どうも典型的い

じめの雰囲気になっていた。しかし、ぼくは先生にも両親にも相談したことはない。話したってどうにもならないと思ったからだ。

二年に進級して幸いその連中とは違うクラスになった。しかし、彼らはたまに出会おうと相変わらずぼくにちょっかいを出してきた。あるとき同じクラスのOという、口は悪いけれど大柄で気の優しい子が見かねて彼らを撃退してくれた。それ以後ぼくはOと友達になり、彼がぼくを守ってくれるような形になったので、ぼくに対するいじめはなくなった。しかし、いじめ連中は違うクラスでまた新たなパシリを作っていた。結局、いじめは永遠に不滅ってやつだ……。

三

夕食後ぼくはOに電話をかけた。確か中学校の時ムクが好きだと聞いたことがある。彼は絵が得意で将来画家を目指していた。本当はうちの美術コースに入りたかったらしい。でも、成績で無理だということで、今はU高校に通っている。U高はこの学区のランクでは一番下と見られていた。

電話にはOが直接出てきた。ちょっと挨拶を交わすと、ぼくはすぐ本題に入った。Oは受話器の向こうで叫んだ。

—何いムクの『叫び』は何を叫んでいるかって？ お前もまたどうでもいいことをよく問題にするねえ。悪い癖だぜ……。

ま、絵というものはキャンバス全部が意味を持っているから、その一部だけ取り上げてどうこう言っても仕方がないと思うぜ。あの絵は斜めに描かれた橋とか、橋の上の遠くの人物とか、真っ赤と黄色が混ざったような夕焼けの空とか、全てが叫びそのもの、または叫びのきっかけとなっているんだ—

さすがに絵を志すだけあって素人とはひと味違う発言だと思った。

—だから、まあ絵全体が我々に何かを叫んでいると思えばいいんじゃないか。何？ それでも何を叫んでいるか気になるって？ うーん、強いて言えばバカヤローかな—

馬鹿野郎……はないんじゃない？

—何？ そんなに長い文句を言ってるはずがないって？ 人間の不安はどうなるって？ バカヤロー、そんなものは見ている者が自由に感じとりゃいいんだよ。だいたいお前Y高行ってブンゲー部に入ってから、どうも物事を深刻に考えすぎるんじゃないの。俺のコーコー来てごらん。そんな質問したら殴られちゃうよ、ったく。俺？ 俺はもちろん殴んないけどね。だからちゃんと真面目に答えてやってるじゃないか。ま、お前はお前流に考えて何か結論が出たら俺にも教えてくれや。じゃあな—

そう言ってOは一方的に電話を切った。ぼくにはOがどことなく苛立っているように思えた。それとも、ぼくとはあまり話したくないのだろうか。

Oとは五月頃一回会った。そのとき彼は何か投げやりで気力のない目をしていて。そして今日も対応が荒っぽい。中学校を出てたったの数ヶ月なのに、Oは変わってしまったのか。それとも学校の影響だろうか。

ぼくはそんなことを考えてちょっとセンチな気分になった。もっともOは「バカヤロー」という答えをくれた。

ぼくはムンクの絵を見ながら「バカヤロー」と呟いてみた。

どうも合わない。橋の上の人物は何か恐怖か驚きのような表情を見せている。「バカ野郎」と、ののしっているような顔ではない。一体、彼または彼女は何に恐怖したのか。何に驚いたのか。

階下でママが大きな声でぼくを呼んでいる。「なーにー」と聞いても、「とにかくすぐ降りていらっしやい」とうるさい。ぼくはしぶしぶ下に降りた。

「早く早く。あなたが言っていたドリアン何とかの『叫ぶ詩人の会』ってこれじゃないの？」

ママがテレビを指さしながら言った。パパもママのそばのソファに座っている。

テレビ画面の中央に金髪の男が立ち、左右にギターとベース、後ろにドラムスという四人編成のバンドが今にも歌い始めるところだった。

ドラムスの下の台に『叫ぶ詩人の会』とある。名前は知っていたけれど、このバンドは見るのも聞くのも始めてだった。

ぼくはママの隣に座って画面を見つめた。ママは「テレビ朝日のニュース・ステーションよ」と言ってぼくの肩に手を回した。ぼくは振り払わなかった。別に怖いものを見るわけじゃないのに……。

すぐ「ぎっこんぱったん」という変な題の歌が始まった。

歌っているのがおそらくドリアン助川だろう。顔のでっかい、身長もかなりありそうな大柄な人だった。マイクを握って彼は「ぎっこんぱったん、ぎっこんぱったん……」と歌い始めた。妙な合いの手だけれど、調子は良かった。

ドリアン助川は叫ぶように歌っていた。だが、聞いた感じは普通の歌だ。ただ、詩の内容がそこらへんのポップス、ニューミュージックなんかとは全然違う。どちらかと言えばロック系統になるのだろうか。

世の中はどうもおかしい。シーソーのように一方が上がったら他方が下がるはずなのに、ちっとも下がらない——なんていうのがテーマのようだ。

たくさんのごちゃごちゃ歌われていたので、いちいちの内容は覚えられなかった。政治とか教育、社会、家庭、ありとあらゆる妙な点を取り上げて

歌っていた。

印象に残っているのは「援助交際、売る女子高校生に買う大人達、買う者がいりゃ、売る者がいる。ぎっこんぱったん、ぎっこんぱったん」とか、「動物愛護を言って肉食ってる」とか……。とにかくドリアン助川の叫ぶような歌は迫力があつた。

曲が終わると彼はぐったりといった感じで頭を垂れた。テレビはコマーシャルに移った。

「一言で言えば矛盾ってことだな……」

暫くしてパパが呟くように言った。ママもそうだというようにうなずいた。

ドリアンの歌はパパママにも何かを感じさせたようだ。しかし、パパはそうまとめたことで、もう歌への感想はいっちょ上がりって感じた。

ママはぼくにケーキと紅茶を出してくれた。ぼくは黙ったままケーキに手をつけた。イチゴがのったショートケーキ。もちろんぼくの好物だ。

ママはケーキもそこらへんのスーパーとか菓子店なんかでは買わない。かなり離れた五つ星の専門店まで行く。このケーキはスポンジなど舌にとろけるうまさだ。ぼくはテレビを見ながらゆっくりケーキを味わった。

ドリアンの歌は確かに矛盾を表していそうだが、でも、それって何の意味もないね、とパパに言いたかった。一言で言えないからドリアンはあんなに長くいろいろなことを書き連ねているんだ。

彼の歌には怒りって言うか憤りって言うか、今の世の中、そして自分自身への情けなさが充満していた。腹の中のむしゃくしゃした何か、ごちゃごちゃ、どろどろした何かを全て吐き出しているように思えた。それは一つ一つ取り上げなきゃ気が済まないものなんだ。

だから、ドリアンの歌はぼく流に一言で言えば「世の中どこかおかしいぞ」ってところだろうか。ぼくはムンクの絵を思い出しながら、心の中で「世の中どこかおかしいぞー」って叫んでみた。いや、これもあの絵と合わない……。

ドリアン助川はその後「青年」という題の歌を歌った。これはそれほど衝撃的ではなかった。パパとママはいろいろ感想を語り合っている。もちろん主としてママが喋ってパパはもっぱら聞き役だ。

ぼくは紅茶を飲み干すと、「ごちそうさま」と言って席を立った。ママはぼくが一言も感想を言わないので、つまらなさそうな顔をしていた。でも、ぼくにだってやりたいことがあるんだ。

ぼくは部屋に戻るとパソコンのスイッチを入れた。インターネットで「ドリアン助川」と「叫ぶ詩人の会」を検索してみようと思ったからだ。「ぎっこんぱったん」の歌詞をもっと詳しく知りたかったし、他にどんな歌があるか探つ

てみたかった。

結局どちらも同じホームページにたどり着いた。でも、ドリアンとそのバンドのプロフィール中心のページで歌詞は載っていなかった。

ドリアンの経歴はよくわかったけれど、ホームページの内容はちょっと失望した。ただ、おかげではっきりしたこともある。ぼくはずっとドリアンと言うDJが歌を歌い始めたと思っていた。しかし、ドリアンはロック・バンドの「叫ぶ詩人の会」を結成したのが先で、ラジオの人生相談は後になって始めたのだった。

それからプロバイダーのN・サーバを開いて久しぶりに「掲示板」をクリックした。

パソコンは四月に高校入試合格のご褒美として買ってもらった。プロバイダーはNに加入した。最初の接続でわくわくしながら「掲示板」の「文通コーナー」を読んだ時びっくりした記憶がある。たくさんの人がさまざまなメッセージを掲載していた。

最も多かったのはメール下さいってやつ。大抵は自己紹介を書き連ねて最後に自分のIDナンバーが記されている。「いたずら、いやです」の添え書きも結構あった。

ぼくは「文通コーナー」の見出しから面白そうなやつを片っ端から開いてみた。

相変わらずの文面だ。ある女性らしい人はいろいろ自己プロフィールを記した後、「実は私太ってるんです。身長も低いんです。でも、こんな私で良かったらメール下さい」とあった。また別の男性は「パソコンお宅ですが、〇〇県内の女性付き合ってください」と書いていた。

スクロールしていくと全部で数百はあるだろうか。これがほとんど全て一日か二日で消されてしまう。それでも誰かしら毎日のように「メール待ってます」の便りを出し続けている。ぼくは今まで「掲示板」の発信者にメールを出したことはない。でも、どこかの誰かはこの人ならと思って返信メールを出すのだろうか。

これを見ていると何だか独りぼっちで淋しくて仕方のない人たちが日本中にひしめいているように思える。彼らは独りぼっちの叫びをキーボードに叩きつけているのかもしれない。

ぼくはムンクの絵を見ながら「淋しいよー」と呟いてみた。

……うーん、やっぱり違うなあ。

さらに「助けて助けて」と叫んでみた。これは何となく近い気がする。

でも「助けて」には驚きの表情はない。やはりどこか合っていないと言うべきだ。

それからN・サーブを切断してウィン95を閉じた。画面が暗くなった。

ぼくは思った。また今夜も誰かがこの画面の向こうで「掲示板」に載せるメールを打ち込んでいる。そして、どこかの誰かからのメールを待っているんだろうなど。

四

それから数日後、ぼくは昼食を済ませると家を出て従姉の家に向かった。いとはE高校の二年生で、ママのお姉さんの子どもになる。彼女もパソコンを持っている。N・サーブにも入っているので、ぼくは時々彼女とメールをやりとりしていた。

先日の夜思い出してもう一度Nを開き、いどこにメールを打った。もちろんムク『叫び』は何を叫んでいるか、考えてほしいという内容だ。

そうしたら昨日返事が届いて「家に遊びに来ないか」とあった。彼女の家で話そうと言うのだ。

いとこの家は小田急S駅近くにある。二階建ての一軒家で、正門右に小さな篠竹の群れがあって奥は芝生張りの庭だ。ぼくの家も一軒家だけど、いとこの家の方が全体的に広かった。

いとはこの学区でトップクラスのE高に行くぐらいだから、かなり成績優秀だ。いや、「優秀だった」と言うべきかもしれない。一年の終わり頃からどうも成績がどんどん下がりはじめたらしい。最近よく訪ねて来る伯母がぐちるのを聞いたことがある。

両親は二人とも仕事らしく、家にはいとこだけがいた。彼女も一人っ子だ。

いつもなら猫のトムキヤットが迎えに出て来るのに今日はいなかった。いとこに聞くと「外に遊びに行ってるんだろう」と言った。

いとは二階の自分の部屋にぼくを案内した。ぼくはいつもの癖でバッグをかつぎ直すと、彼女について階段を上がった。

いとは真っ赤なミニスカをはいていたので、ちょっと目のやり場に困った。部屋はエアコンが効いて涼しかった。

彼女の部屋に入るのは三ヶ月振りくらいだ。部屋は八畳程のフローリングなんだけど、半分を彼女のベッドが占領している。それがダブルだから驚く。前にその訳を聞いたら「広くてゆったりできるし、友達が来たときなど一緒に寝れるからいい」なんて言っていた。もちろん女の子の友達らしいけど。

いとはジュースを持ってくると、小さな丸テーブルの上に置いた。ぼくは彼女と向き合うような形で簡易イスに座った。二人の姿が壁際の大きな姿見に

映っている。

コップの中は氷入りのオレンジ・ジュースだった。一口飲んだ。妙に甘くて妙に酸っぱくて苦い。ぼくはオレンジ・ジュースはあまり好きじゃない。

「どうだった一学期の成績は。高校の試験って中学より難しいね」

ぼくは取りあえず、そんな話から始めることにした。

いともジュースを口にして「試験はまだなの」と投げやりな感じで答えた。

「えっ、どうして？」

「うちは今年から前期・後期の二期制になったの。だから、前期期末試験は九月中旬にあるってわけ。ったくうんざりしちゃう。七月は夏休み直前まで授業、授業、また授業の連続。もうチョーむかつくってやつ」

いとはあまり女子コーセイ言葉を使わない人だったけど、何だか言葉遣いが荒くなったような気がした。髪の毛も少し茶色っぽかった。ピアスやマニキュアは付けていない。ただかすかにシャンプーと化粧の匂いがした。いとは耳が大きくて最近売り出し中の女優に似ている。

授業が二期制になったってことは前にメールで聞いていたかもしれない。

「そう、大変だったね……」

もったもこっちゃだって期末試験後、午前中授業になったとは言え、七月初めの猛烈な暑さにうんざりしていたっけ。

「ところで、あの件考えてくれた？ ムンクの『叫び』は一体何を叫んでいるのかってこと」

ぼくは本題に入った。

「うん。ちょっと考えてみたけど、何でそんなことに興味を持ったの？」

いとはぼくが文芸部に入ったことは知っている。でも、昨日のメールではいきさつまで詳しく書かなかった。ぼくは文芸部の日常活動や夏休みの共通課題などかいつまんで話した。

いとは「ふーん」と長いため息をもらした。

「なかなか面白そうじゃない。じゃあ文芸部全員が同じテーマで小説を書くんだ」

「小説と言ったってショートショートだけどね」

「なるほどね。でも、あなたのようにムンクの絵をめぐる内容となると、何だか『叫び』というテーマについて書いてるようには思えないけど、それでもいいの？」

痛いところを突かれた。その通りだからぼくは返事のしようがなかった。

いとはいたずらっぽく笑った。

「ははあ凶星のようね。書くのに困ってムンクを持ち出したんでしょ」

「うるさいなあ……ったく。ぼくはぼくのやり方で書くんだからいいじゃないか。それより絵の中の人物が何を叫んでいるか教えてくれないの？ 答えがないんだったらぼく帰るよ」

ぼくはふくれっ面をして言った。別に怒っているわけではなかった。ただ、いとこのいたずらっぽい笑顔がどきっとするくらい魅力的だったんで妙に胸騒ぎがした。こういう時は子どもにかえった方がいいと思ったんだ。

いとは大きく笑って「怒んな、怒んな」と言った。それから真顔になった。「たしかにあの絵って人を惹きつけるわね。一度見ただけではっきり頭に残るし。何だか怖いような絵よね。あなたの家ムンクの美術全集なかったでしょ。私ん家(ち)お父さんが集英社版の「現代世界美術全集」を持っていて、その中にムンクの画集があったの。だから、ムンクの他の絵を見たら何か参考になるんじゃないかと思った。それで来てもらったのよ」

彼女は机から『ムンク／カンディンスキー』の分厚い一冊を持って来た。ムンクとカンディンスキー、二人の画家の作品が掲載された画集だ。ぼくはムンクの他の絵を見るのは初めてだ。「そうだったの。ありがとう」と言ってその画集を受け取った。いとはぼくが見ている間果物でも持って来ると言って部屋を出ていった。

ぼくは早速ムンクの絵をめくってみた。その前にコップのジュースをもう一口飲んだ。やっぱり妙に苦くて甘くて酸っぱい。これはオレンジ百パーセントのジュースのようだ。たぶんパックか瓶詰めはやつだ。絞り立てのオレンジだったらこんな味はしない。もちろんフレッシュジュースなら、ぼくは文句なしに好きだ。でも、いところに絞り立てのオレンジを要求するのは酷ってもんだ。ぼくはジュースの残りを全部喉に流し込んだ。しかめっ面がしっかり姿見に映る。いとこがいない時で良かったと思った。

それから全集を開いた。見開きページにムンクの顔写真があった。『叫び』の印象からムンクって人は何となくやせ細った人だろうと思っていた。ところが写真を見ると、意外にも四角顔で小太りだ。そしてムンクの絵が始まる。女性の全体像やムンクの妹の肖像画。ムンク自身の肖像画もあった。そのうち『叫び』が登場した。『叫び』の右隣には『叫び』の石版画もあった。『叫び』は美術の教科書より大きな画面で見られた。ただ印象は特に変わらない。他の作品では『不安』という絵が『叫び』とよく似ていた。特に斜めに描かれた橋や橋の上に数人の人物を配したところとか、背景の湖や夕焼けの空などそっくりだ。どおりで「現代人の不安の叫び」なんて解釈が出るわけだ。

あと『叫び』に関連して気づいたことがある。叫んでいる人物がムンクの他の作に描かれた、奇妙にねじれた薄気味悪い赤ん坊（か子ども）の顔に似ていたことだ。

いとこがスイカをのせた皿を持って入ってきた。

「どう？ いろいろわかったんじゃない」

「うーん。わかったって言うか、もっとわからなくなったって言うか……」

ぼくはスイカを片目に捉えながら美術書を伏せてわけのわからないことを呟いてしまった。スイカは好物なので、既に頭の中はスイカにかぶりつくことしか考えていなかった。

スイカは六つに切っている。自分の分は三つかなとすばやく計算もした。二つのことは同時にできない。これがぼくの欠点でもあるんだ。

いとこはくすつと笑って「じゃあ取りあえずスイカタイムにしましょう」と言った。

ぼくは姿見に映るいとこの横顔を見てまたぞくっと来た。Tシャツの胸のふくらみに目が行った。この家にはいとことぼくの二人しかいない。それが変に意識された。そばにはダブルのベッドだし。これって危ないんじゃないか。ぼくだって男なんだから。

でも、ぼくは「やったー！」と叫んで、子どものようにスイカにかぶりついた。いとこもにこにこしながらスイカを手にした。そして、彼女は上品に食べながら、母親のような視線でぼくを見ていた。

スイカはぴったしの甘さでよく冷えていた。ぼくは六切れのうち、あつという間に三切れ食べてしまった。いとこはやっと一切れ食べ終わったところだ。

もちろん彼女はもう一切れぼくに分けてくれた。端っこじゃない方をどうぞと言ったから、さすがいとこは大人だと思う。

食べ終わると、ぼくの口はスイカの汁だらけになった。すると二つめのスイカを終えたいとこがハンカチを出して、何だかぼくの口元を拭いてくれそうな様子を見せた。

ぼくはあわてて自分のハンカチで口の周りや顔の汗を拭きまくった。いとこはまた見透かしたようにくすつと笑った。

そのときぼくは突然ずっと昔のことを思い出した。ぼくが三歳か四歳の頃だ。ママの田舎で初めていとこ一家と顔を合わせた。あれも夏だった。いとこと二人でいろいろ遊んだ後、縁側で冷えたスイカをたらふく食った。座敷ではパパ達がビールを飲み、ママ達はおしゃべりをしていた。田舎のじいちゃんばあちゃんもいた。

そのとき一つ上の彼女はお姉さんのように、手にしたハンカチかお手拭きでぼくの口元を拭いてくれた……。

いとこはちょっと遠くを見る目つきになっていた。もしかしたら彼女もそのときのことを思い出したのかもしれない。

ぼくは何だか妙な空気を感じて押し黙ってしまった。

いとこの方がすぐに復活した。彼女は画集を手にする『叫び』のページを開きながら言った。

「私もねムンクの絵を見ながら、あの人物は何を叫んでいるか考えてみた。ムンクって人はあまり幸せな幼年時代を送っていないのよね。五歳の時お母さんと死に別れて成長したとか、父親が偏屈な人で家庭に楽しい雰囲気になかったとか。

ムンクが十四歳の時には母親代わりだった姉を病気で失っているし。ムンクは八十歳まで生きてただけど、生涯独身だったようね。後ろの解説にあった。

ところで、この『叫び』の中で叫んでいる人って大人って言うより、どこか子どものような感じがしない？」

「うん。ぼくもムンクの他の絵を見て、つるつる頭の人物って薄気味悪い目をした子どもに似ているなって思ったところなんだ」

「そうなのよ。あの叫んでいる人は本当は子どもなのかもしれない。もしそうだとすると、あの子が叫ぶ理由は一つしかないわ」

いとこは、やけに自信ありげに言った。ぼくは「何だい？」って聞いた。

「あの子は『ぼくを見捨てないで』って叫んでいるのよ。ほら、この橋の上、向こうの方に背を向けた二人の大人がいるじゃない」

ぼくはいとこに近づいて絵をのぞき込んだ。確かに橋の上に二人の人物がすらりと立っている。二人は橋の向こうへ歩いて行くように見える。叫んでいる子どものことなんか全く知らないという感じだ。

そのときぼくといとこの顔がかなり接近した。ぼくは彼女の甘いような香りを感じてまたどきとした。いとこは頓着なく続けた。

「これはたぶんこの子の父親と母親だと思う。父と母はこの子を見捨ててどこかへ行こうとしているのよ。この子はそれを本能的に感じ取って『いやだー！』って感じの声を上げているんじゃないかしら。『捨てないで！』って叫んでいるのよ」

ぼくは「ふーん」と言って自分のイスに戻った（ホントはそのままいとこのそばにいたかったんだけど）。

彼女の説は面白かった。でも、ぼくはちょっと納得できなかった。あまりにも作者から探りすぎてちょっと深読みって言うか、絵画で言うなら深見（？）じゃないかと思ったからだ。

それに橋の上の二人の人間がその子の父母と言えるかどうか。大人であるこ

とはまず間違いない。左の人はシルクハットを被っているようだから、たぶん男性だ。しかし、右側の人は男性なのか女性なのかよくわからない。果たして叫んでいる子の両親だろうか……。

それを指摘しようと思ったら、いどころが突然涙を流し始めたんで、ぼくはびっくりした。呆気にとられて次の言葉が出てこない。

いとはハンカチで両目を押さえたまま声を出さずに泣いていた。

そして「ごめん。何だか……おかしい」と涙声で言った。

長い数分だった。スイカとオレンジ・ジュースの味がげっぷとなって戻ってきた。苦かった。

「何か……あったの？」ぼくはやつとのことで言った。

エアコンの効き過ぎだろうか肌寒くなってきた。ぼくも伝染したようにセンチになってしまった。

いとはハンカチで涙を拭くと普通の声に戻った。

「今の話ってるで自分のことを言ってみた。今度ね私のお父さんとお母さん、離婚することになったの」

ぼくはさっき以上にびっくりした。突然の告白だ。それはつまりママのお姉さんのことじゃないか。

「まだ正式に決まったわけじゃないけど、まず間違いなく……私はたぶんお母さんに引き取られると思う。この家も出なげゃならないみたい。来月にはZ市のアパートに引っ越す予定なの。お父さんは二ヶ月ほど前からこの家に帰って来てないの」

ぼくは何て言って慰めたらいいのか見当もつかなかった。ここんとこ彼女のメールはあっけらかんとしていた。そんな悩みを抱えていたなんておくびにも出していなかったのに。

「ぼくのママは知ってるの？」

ぼくは聞いた。いとは泣きべそをかいた子どものようにこくんとうなづいた。何だかいどころがいじらしくなった。

「たぶん知ってると思う。お母さんあなたのママのところへ行っているいろいろ相談していたみたいだから。でも、私はちっとも知らなかった。私が聞いた時にはあらかた決まった後だったから。私にはどうしようもなかった。仲がいいと思っていたのに……」

いとはそう言って口を閉ざした。それから彼女はまた遠くを見る目つきになった。

暫く沈黙が続いた。またげっぷがこみ上げてきた。今度はその音が漏れてしまった。

ぼくよりいとこの方が大人だった。彼女はくすつと笑って「ごめん」と言うと、完全に立ち直った（ように見えた）。

「ごめんね。あなたにこんな話しちゃって。でも、誰かに話したかったんだ」「いいんだよ。世の中いろいろあるもんね」

それから彼女は気を取り直すように、親は親、自分は自分だとか、新しい家に行ってもメール出すから返事ちょうだいね、などいろいろなことを喋った。ぼくはもっぱら相づちを打つことしかできなかった。

いとこの家には二時間もいただろうか。ぼくはバッグをかつぎ直して彼女の家を出た。玄関で別れる時いところが明るい笑顔を見せてくれたのが救いだ。

外は真夏の日差しが照りつける。汗がどっと出てきた。駅の方に五分も歩いた頃ぼくは「しまった」と叫んだ。彼女から借りていたゲームのCDを返そうとバッグの中に入れていたのに、すっかり忘れてしまった。この暑さの中をまた往復するのか……そう思ってどうするか迷った。

今思えば「しまった」と叫んだとき周囲に誰もいなくてよかった。でもこのとき「しまった」と叫んで頬に手をやったら、ムンクの『叫び』に似ているな——なんてバカなことも考えたっけ。

結局、ぼくはいとこの家まで引き返すことにした。

玄関に鍵がかかっているのに、いここはいなかった。ぼくは勝手に中に入って彼女の部屋まで行ってみた。そこにもいない。トイレでもない。

おそらくすぐ戻るつもりでどこか近くへ出かけたのだろう。不用心だと思ったけれど、いとこの机の上にCDとメモを置いといた。

それからぼくは例のダブルベッドにちょっと寝っ転がってみた。横になっていると、何となく恥ずかしくなってぼくはすぐ起き上がった。いとこの部屋にいるときに、彼女が帰ってきちゃまずいな。

ぼくは一階に降りると何となく居間に入った。そして、ふと外の庭を見て塀際の木の下にぬいぐるみのようなものを見かけた。だが、ぬいぐるみにしては妙な感じだ。ぼくは玄関を出て籐竹のわきを通過して庭に行った。

ぬいぐるみに近づいて仰天した。それは何と猫の死体だ。いとこが飼っていたトム・キャットだ。死んじゃったんだ。でも、彼女はなぜ死んだと言わなかったのだろうか……。

さらに近づいてもっと驚いた。猫の首の辺りに地肌って言うかピンクの肉色が見えたからだ。よく見ると猫は首と胴体が切り離されていた。

ぼくは大声を上げそうになった。頭がパニック状態になった。すぐに神戸の事件が思い浮かんだ。ピンクの肉色は包丁か何かで切られた痕のようだ。切断面には赤い血の色をした肉と、白っぽい骨さえ見えた。

いたずらなのか、一体誰がこんなひどい殺し方をしたのか。しかし、地面に血は流れていない。猫の頭も胴体も洗われたようにきれいだ。いところが洗ったのだろうか。

いつ？ 昨日？ 今日？ だったら彼女はなぜぼくにこのことをうち明けなかったんだろう。あるいは、これからここに埋めようとでもいうのか。まさかいところが……。ぼくは何だか身体が震えるような気がした。

いや、そんなはずはない。彼女はたった今これに気づいて警察に飛んで行ったんじゃないのか。でも……いや……しかし……。

とにかくぼくには何が何だかわけがわからなかった。いとはどこへ行ったのか。いところが帰るのを待つべきか。それともぼくも近くの交番に飛んで行くべきか。あるいは、このまま帰っちゃった方がいいのか。

いところが言っていた、来月にはここを引き払ってアパートに引っ越す予定だという言葉もひっかかった。

アパートじゃ猫は飼えないかもしれない。しかし、そんな理由で猫を殺すだろうか。第一この猫は彼女が可愛がっていた猫じゃないか。それに首と胴体を切り離すと言うのもひどすぎる。

いや、あのいところがそんなことをするはずがない。きっと誰か他の奴がやったんだ。

そのときぼくはあることに気づいた。そうかと思った。ムンクの絵が何を叫んでいたか、突然わかった気がした。

これを叫んでいたんだ。そうだ、そうに違いない！

いとこと顔を合わせない方がいい。ぼくはそう思ってその場を離れた。そして、いとこの家を後にして足早に駅に向かった。

五

「ママ！ ママ！ いる？」

ぼくは家に飛び込むとすぐにママを呼んだ。ぼくの思いつきを誰かに喋らずにおれなかった。

ところが、ママは廊下で電話中だった。ママは口を人差し指で押さえて「しーっ」と言った。

ぼくはちょっと氣勢を殺がれた。仕方なく居間のソファで電話が終わるのを待った。

ママの電話は結構長かった。ほとんど「はい…はい…」とだけ言って一度だけ「うちの主人に限って」なんて言葉が聞こえてきた。

その後はまた「はい…はい…」の連続だった。

電話を終え、居間に入って来たママは少しぼうっとしていた。でも、ぼくの視線に気づくと、いつものママに戻った。

「はいはい。どうしたのよ、そんなにあわてて」

ぼくはさっきの勢いを復活させた。

「わかったんだよ、ママ。ムンクの『叫び』。あの人物が何を叫んでいたか、やっとわかったんだ」

「あらそう。一体何を叫んでいたの」

ぼくは一呼吸入れて大きく息を吸った。

「ムンクの絵の中で、あの人物は橋の上に立っているでしょ。彼は橋のたもとに何かを見つけたんだ。あの橋のたもとには何かがあるんだよ。あの人物はそれを見て恐怖の叫びを上げたんだ。何だと思う？」

それはね死体さ。死体の首が転がっているんだよ。そう死体の首なんだ！彼は転がった首を見て顔をゆがめ、頬に手をあてて驚きと恐怖の声で叫んだんだよ！『何てことを！』、『ひどい！』って」

ママの顔から血の気がひいた。目つきが鋭くなった。

「何てことを言うんです！ いけません！ そんなこと言っちゃ！」

しかし、ぼくはやめなかった。言わずにおれなかった。

「そうじゃないか！ 神戸のあの事件。中学校の正門に子どもの首が転がっていた。それを最初に見つけた人はきっとムンクの絵と同じ顔をしたと思うよ。そして、日本国中の人がああニュースを聞いたとき、やっぱり顔をゆがめながら心の中で叫んだんだ！『何てことを！』、『ひどい！』って。

だから、子どもの首を置いたあの少年は……なんて奴だろう、日本中にムンクの『叫び』を体験させたんだ。そうさ、あの絵の、あの橋のたもとには死体の首があるんだ！絵の中の彼はその恐怖と驚きの声を上げているんだよ！」

ぼくは一気にまくしたてた。この思いつきだけは間違っていない。ぼくはそう確信していた。

ママはじっとぼくの顔を見ていた。そのうちママの顔がゆっくりと、まるでムンクの絵のようにゆがんだ。

ぼくはびっくりして目をぱちぱちさせた。そうしたら突然ママは両手で顔を押しえて泣き始めた。くぐもったような声で泣いている。

ぼくは拍子抜けした。何でと思った。泣くようなことだろうか？

途端に頭にのぼっていた血がすうっと引くような気がした。

ママは顔を振るようにして泣き続けた。ママの涙を見るのは何年振りだろうか？ たしかぼくが小学校の一年か二年のときだ。特に何もなかったのに、ママはぼくを抱きしめて激しく泣いたことがある。でも、今日は抱きしめないようだ……。

暫くしてぼくは「ごめん。ママ……」と謝った。

ぼくの考えに誤りはないと思う。しかし、ママには刺激が強すぎたんだ。

ママは泣きやむと人の命の大切さとか思いやりとか、優しい心とか、そんなことをぼくに話し始めた。

ぼくはちょっとうんざりした。そんなこととぼくの思いつきは関係ない。ぼくが妙なことを口走ったからってぼくは思いやりのない残酷な人間じゃない。でも、ぼくは神妙にママの話聞いた。ただその間も頭の中では違うことを考え始めていた。

神戸のあの少年は顔見知りの小学生を殺し、その首を切り離して中学校の正門に置いた。あの少年は一体何を叫びたかったんだろうって。

その夜、ぼくはここ二日間のことを日記に書き留めた。何だか『叫び』をめぐるたった二日でいろいろなことがあった。

そう言えばいとこの家のことをママに聞き損ねた。いとこのパパとママが離婚するって本当なのか。どうしてそんなことになったのか。

いとこのパパはカッコいいし、ママも美人でキャリアウーマンだから、最近流行の「失樂園」状態にでもなったんだろうか。

でも、ぼくのママは詳しいことを話してくれないだろう。大人の世界のことだ。それに聞いたとしても、ぼくにはどうすることもできない。いとこはかわいそうだけど。

そのときうちのパパとママは大丈夫だろうかと思った。ある日突然「私たち離婚するの」なんて言われたら、確かにムクの『叫び』のような顔になるかもしれない。ぼくの家だってあり得ないことじゃない。

ぼくはパパとママのことをよく知っているようで、ほとんど何も知らない。でも、ぼくのパパはイマイチかっこよくないし、ママも……だから、大丈夫だろう。

文芸部の課題『叫び』は提出までまだ一ヶ月ある。一体何を書くか。いとも言ったように『叫び』そのものではどうも書けそうにない。この数日間のことを私小説みたいにして書いてみようか。でも、何だか冴えない。あいつら結構ユーモアあふれた作品を書くし、ぼくのはちっとも面白くないもんなあ。

階下でママが呼んでいる。Oから電話だそうだ。

受話器を渡すときママのちょっと冷めた視線が気になった。

—よお元気か。昨日のムクの『叫び』の件だけど結論出たか？—

彼からこの件でまた電話がかかって来るとは意外だった。ママとの一件でがつくりきていたので、これはラッキーだ。Oならばぼくの説をわかってくれるかもしれない。

ぼくはママに喋ったことを、ほぼそのままOに伝えた。ちょっと小声で。

—ふーん、なるほどねえ。橋のたもとに死体の首が転がっているか。いかにもお宅系のブンガク志望が考えそうな説だな—

ぼくはちょっとかちんときた。でも、反論しなかった。するとOはいとこと同じように、なぜそんなことに関心を持ったか聞いてきた。

ぼくは文芸部の課題の話をした。Oの批判を予想してムンクの『叫び』について書くことは課題に答えていないかも知れない。それも付け加えた。

—そうだなあ……俺はムンクの絵についてお前がいろいろ考えたことを書いたとしても、別に構わないと思うぜ。たぶん他の連中も『叫び』そのものなんて書けやしないさ。お前がお前なりにテーマにアタックしたことをそのまま書けばいいんじゃないか。それがお前の『叫び』なんだよ—

Oは口は悪いけど、ときどきこんなふうにはぼくを励ますようなことを言ってくれる。だから、ぼくはOが好きだ。

—それじゃあお前の『叫び』の参考になりそうなことを少々教えてやろうじゃないか—

こういうちょっと人を見下したような言い方はあんまり好きじゃない。

—お前も神戸のあの事件からヒントを得たようだけど、実は俺もそうなんだ。昨日から今日にかけてムンクの『叫び』をじっくり眺めた。それで気づいたんだ。まずあの叫んでいる人物だけど、大人って言うより子どもに近いと思わないか—

ぼくはあれっと思った。さすがと言うか何と言うか、Oも同じことを考えたようだ。ぼくは同意見だと答えた。

—そうか、お前も気づいたか。俺はあの人物は子どもだと思ふ。そして、さらに考えたんだ。もしも叫んでいるあの子を消してしまったら、絵はどう見えるだろうか……って—

叫んでいる子を消してしまう？ どういうこと？

—うん。たとえば、お前のところにあの絵があったら、やってみるといい。紙か何かであの叫んでいる子を覆い隠してしまうのさ—

手元に美術の教科書はない。しかし、何度も『叫び』を眺めたので、それを思い浮かべることができた。それではっと思った。ムンクの『叫び』から叫んでいる人物を取ってしまったら、何の変哲もないただの風景画じゃないか。

—そうだろう。なんでもない普通の風景になってしまうんだ。橋の上を二人の大人がのんびり歩いている。遠くの方には船が浮かぶ湖が見える。そして夕焼けの空。色使いはどぎついけど単なる風景画だよな。

それで思ったんだ。つまり透明なんだよ。叫んでいる子は透明な存在ってことさ。あの子は何かを叫んでいる。必死に叫んでいる。けれど、大人は気づい

てくれない。橋の上の大人二人が背中を向けているのはそのことを象徴していると思うんだ。

向こう向きに歩く大人が親なのか身近な人なのか、それはわからない。あるいは通りすがりの人なのかもしれない。でも、とにかく大人であることは間違いない。その大人連中はあの子が叫んでいるなんて思いもしない。全く気づくことなく立ち去っていく……。

そうなんだ。叫んでいるあの子は透明な存在なんだよ。しかし、あの夕焼けの描き方からすると、あの子が叫んでいることを夕焼け、つまり自然はわかっていると思う。

だから、空気はゆがみ、色彩はどろどろになってあの子の叫びに対応しているんだ。でも、橋の上の大人は子どもが叫んでいるなんて気づいていない。そして、湖に浮かぶ船、おそらくその中にも大人達が乗っている。船の人間だっであまりに遠すぎるからあの子の叫びを気づくはずもない。これがあの絵全体の意味じゃないかと思うんだ—

ぼくは感心した。Oの説はすごいと思った。神戸の事件の犯行声明にあった「透明な存在」をヒントに、ムンクの絵を解き明かしている。いや、ムンクの『叫び』を解析していったら「透明な存在」にたどり着いたと言うべきか。

絵の中の子どもは確かに叫んでいる。でも、その叫びは誰にも届いていない。もしあの子がムンクだとしたら、子供時代のムンクの叫びは誰にも届いていなかったのかもしれない……。ぼくは感嘆の声をあげた。

—まあ、それほどでもないけどね。しかし、透明な存在という言葉はなんか感じさせるものがあるよな。神戸の十四歳の少年は自分自身を透明な存在と言ったけど、俺達だって同じようなもんだぜ。だから、俺はこの夏休みは好きな絵を、描いて描いて描きまくろうって思う。もしかしたらそれが俺の存在証明かもしれないしな。ムンクの『叫び』とまではいかなくても、俺の感じている叫びを絵にしてみるよ。それで俺という存在を示そうってね。

俺さU高行ってからちょっと落ち込んでたけど、ムンクの絵を見て何かを思い出したよ。そういう意味では昨日電話してくれたお前のおかげかもな。俺もがんばるからお前もがんばって小説書けよ—

ぼくは「ありがとう、わざわざ電話してくれて。ぼくもがんばって書くよ」と言って電話を切った。

結局長電話になってOの家に随分電話代を使わせてしまった。でも、課題の作品を書き上げたら、真っ先にOに見せよう。

自分の部屋に戻ると、ぼくは日記を開いてOの説を追加した。

Oの推理は当たっているかもしれない。でも、ショックだったのは「俺達だって透明な存在かもしれない」と言った、そちらの方だ。Oはえらくあっさり

と言い切った。そして、その言葉はぼくの心の中に何の違和感もなくすべりこんで来た。

Oの言葉を聞いたときぼくもすぐ心の中で呟いていた。そう言えば、ぼくだって透明な存在なのかもしれないと。

何でだろう？ あの犯行声明を一ト月前に読んだときは自分も透明な存在だなんて思いもしなかったのに……。

そうか。ひと月前は犯人が十四歳の少年だとわかっていなかった。あの犯行声明にしても、大人の犯人が警察をからかっている、つくりものの文章だと思われていた。だから「透明な存在」という言葉をあまり意識しなかったんだ。しかし、その言葉はぼくとほとんど同じ年頃の十四歳の少年が使ったんだ。

「透明な存在」——それは心の深みにどんどん入ってくる。

ぼくは今机に向かっている。ぼくの机は四畳半の勉強部屋の片隅にある。そばには本棚があってパソコンもある。階下ではママが居間にいる。パパはまだ帰っていない。ぼくは確かにここにいる。

でも、ママには、そしてパパには、ぼくが見えているだろうか。先生やクラスのみんなどか、文芸部の連中だってぼくの姿は見えているのだろうか。そう考えると何だか怖くなる。叫びたくなるようなじれったさを感じる。

天井がぼくを押さえつけるような圧迫感。この部屋にはぼくしかいない。ぼく自身が透明になって消えていくような感覚。もしかしたらぼくの姿は誰にも見えていないのではないか。ぼくが顔をゆがめて懸命に叫んだとしても。

自分の考えがOの説と少しずれ始めたような気がした。Oは『叫び』の子は何かを叫んでいる。しかし、その叫びは大人に届かない。透明な存在だ」と言った。でも、よく考えてみるとあの子が何を叫んでいるのか——彼はそれについて答えていない。

そうだ。あの子はもしかしたら自分はここにいると叫んでいたのかも知れない。自分という存在が透明であるように思えて「自分はここにいる」と、必死に叫んでいたのかもしれない。でも、大人は誰も気づいてくれなかった。

ぼくは今現在のことを考えてぞっとした。この日本のどこかで誰かがいろいろなことを必死に叫んでいる。でも、叫んでも叫んでも誰も気づいてくれないうとしたら。一体その人はどうするだろう？ 自分が見えていないという思いにとらわれ続けたとしたら……。

ぼくは神戸の少年のことを考えた。十四歳の少年がどうしてあんなひどい事件を起こしたのか、理由はまだわかっていない。でも、自らを「透明な存在」と呼んだあの少年は最も目立つことをやってのけた。それだけは間違いない。悲惨でむちゃくちゃなやり方だけど、彼は彼という存在を人々の脳裏に焼き付

けた。

目立ちたいからなんて単純な理由であの少年が子どもを殺したとは思えない。でも、透明な存在を目に見えるようにするには何かをする必要があったんだ。

その方法が殺人、そしてその首を切り離して中学校の正門に置くことだとしたら、それはあまりに悲しい。何か他の方法があったはずだ。

たとえば、あの事件全体をフィクションとして創作したら、それだけで充分衝撃的な作品になっただろう。少年の犯行声明はとてぼくと同世代の少年が書いたとは思えないほど整った文章だった。少年の表現力はかなりのものだ。彼は彼が感じた思いを書いていけば、もしかしたらすごい小説を書けたかも知れない。なぜあんなことを実行したのか。

そうだよ！ やっぱり表現するしかないんだ！

ぼくは透明な存在なんかじゃない！ ぼくはぼくというものを外に出すんだ。

ぼくの色を、ぼくの実体を、ぼくが感じたこと、考えたことを、書くことで明らかにするんだ。それがぼくにとっての存在証明なんだから。叫んで、叫んで、叫び続けるんだ！

ぼくは〇のようにこの二日間のことを書いて書いて書きまくろうと思った。

ぼくはパソコンのスイッチを入れてウイン 95 を立ち上げた。「一太郎」を開き、「文書スタイル」を文芸部書式に設定した。

それからちょっと考えて思いつきの表題として、「文芸部作品第八——ムンクの『叫び』（仮題）」と打ち込んだ。もう一つ「透明な叫び（仮題）」も表題の候補として書き足した。

そのときいとこのことを思い出した。「一太郎」を中断してNサーブを開いた。やはりいとこのメールが届いている。

—CD受け取りました。今日はいろいろ話を聞いてくれてありがとう。『叫び』の小説、がんばって書いてください！—

短いメールだった。画面を下にスクロールしたけれど、他に何も書かれていない。

元気を取り戻しかけたのに、ぼくはまたちょっとくじけた。猫のことが一言も触れられていない……。

メールでいどこに問いただしてみようかと思った。だが、何だか聞きづらい。第一ぼくは本当に切り離された猫の死体を見たのだろうか。今となっては自信が持てない。錯覚と言うか、悲惨なニュースに連日の猛暑が重なって幻覚を見たのかもしれない。どうやらこの二日間の整理がついていないようだ……。

ぼくはため息をついてNと「一太郎」を閉じた。パソコンの電源も切った。
そして頬杖をつきながら暫くパソコンの暗い画面を見つめた。

(了)